

お経にあってこそお参りに

仏舎利塔は、日本でお寺やお墓へと姿をかえ、お彼岸にお参りする習慣が受け継がれています。

ところで、お墓参りとは、何を意味するものでしょうか？

それは、先立たれた父母が仏ひがんとなって、彼岸（お浄土）より私たちに願いを届け、お育て下っているということです。お墓に参り「ご恩のわかる身の上になっておくれよ」という亡き人の呼び声を聴くことは、仏舎利塔に集まったお弟子や仏歯寺に参る人々と同じく、お釈迦様の説法に会うことではないでしょうか。

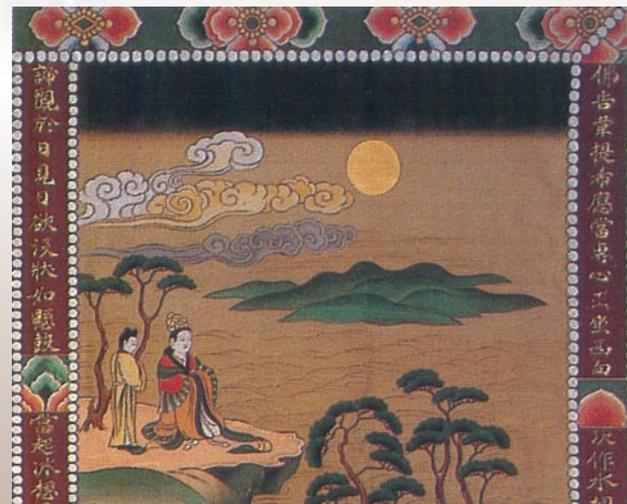
お墓に参ることは、お経（=説法せっぽう）に会うことです。お経に会うとは、お念仏の教えに会うことです。口にお念仏申し、阿弥陀さまのお慈悲に出会ってこそお参りとなるのです。



連絡先

©監修 本願寺仏教音楽・儀礼研究所

お彼岸



當麻寺蔵『當麻曼陀羅』（部分）

お彼岸のいわれ

お彼岸の中ひがん ちゅうにち日（春分と秋分にあたる日）、ゆっくりと真西に沈んでいく夕陽……。

「彼岸」とは川の向こう岸、阿弥あみ陀ださまのお悟りの世界を意味する言葉です。その阿弥あみ陀ださまの国・お浄土は、西の彼方にあるといわれます。先人たちは、真西に沈む夕陽を見て、彼の岸・西方さいほうごくらくじょうど極楽浄土に思いを馳はせました。

『仏説ぶつせつ観無量寿くわんむりょうじゆきやう経』には、阿弥あみ陀ださまの極楽世界を思い描くための方法（観くわん法）が説かれており、その第一は、「日想にっそうかん観」といいます。これは、日没の光景を見て、その後、眼を閉じて、夕陽の姿を思い描けるようにするのです。

太陽が真西に沈むお彼岸の頃は、日想観の実践に最も適した時期といえましょう。お彼岸の一週間は、このようなみ教えにささえられて、阿弥あみ陀ださまのことを想う“仏教週間”として、広く一般に定着してきました。

浄土真宗では

浄土真宗では、日想にっそうかん観のような難かんぼうしい観法はしませんが、七高僧ひちこうそうの一人である善導ぜんどうだいし大師が、「阿弥あみ陀ださまは西の岸から『必ず救うぞ、われにまかせよ』と私たちによびかけておられる」とお示しくださったことから、本願寺でも第八代宗主蓮如上人の時代より彼岸会をお勤めしています。このように“彼岸の心”は、大切に受け継がれているのです。

お彼岸にあたり、先にお浄土へ往かれた方々に導かれて、彼の岸・阿弥あみ陀ださまの国へと続くただ一つの道、お念だいたう仏の大道を歩ませてくださいましょう。

墓参り

仏ぶつ歯しにあう

スリランカには、お釈迦さまの歯が納められている仏ぶつ歯し寺というお寺があります。（写真）尊いお説法をつむぎだしたこの歯に、今も世界中から参拝者が絶えません。



黄金の舎利容器（撮影：丸山勇）

お釈迦さまがお亡くなりになるとき、嘆なげき悲しむお弟子でしたちに「私にあいたければ、仏法を聞いてくれよ。それは私とあっていることになるのだよ」と仰せになりました。

お釈迦さまのご遺骨は分けられて、仏ぶつ舎利しり塔とうに納められました。お弟子たちはそこに集い、仏法を語り合い、お釈迦さまを懐かしんだのです。それは、この上ない恵みになったに違いありません。